

平和主義者 山本宣治と中西伊之助 —尹東柱が残した追憶と平和の記憶より—

李 修京*

本稿は近代日本の戦争史の中で苦しむ民衆（植民地の人々を含む）を擁護し、一抹の希望を見出そうと苦闘した人物の中でも、国境を越えた人道主義的市民連帯を訴えた山本宣治や中西伊之助を中心に考察し、当時の朝鮮とどのような関わりを持ったか、そして彼らの活動が今の時代に何を示唆するのかを考察したものである。筆者は現在、‘平和の抵抗詩人’として評価されている尹東柱が京都に留学中、学友らと訪れた宇治川の天ヶ瀬吊り橋で撮った日本での最後の記念写真が話題になって以来、「平和人権の町」を掲げる宇治で「記憶と和解」を趣旨にして発足された詩碑建立委員会の長い間の活動様子に興味を抱いている。さらに、植民地朝鮮の凄惨な状況を日本で初めて本格的に小説化し、武力支配の実態を告発した中西伊之助や、差別や暴力、戦争と治安維持法に反対したため刺殺された山本宣治が宇治出身である事に着目したのが本稿執筆の契機である。治安維持法違反の嫌疑で逮捕され、異国の地で28歳で獄死した尹東柱も宣治や中西らと同じ平和社会を渴望していた。本稿では尹東柱の最後の記憶となった「宇治」の地で平和思想を貫いた山本宣治、中西伊之助を主に考察し、彼らの活動や周辺人物らについて考える。

キーワード：尹東柱、宇治、山本宣治、中西伊之助

はじめに

本稿は差別のない生活と平和社会の具現に尽力した「宇治」の地に縁のある人物について考察し、彼らの人道主義精神の再確認と植民地朝鮮との関わりについて論じるものである。

周知の通り、2010年は日本が帝国主義展開の目標にしていた大陸経営の野望によって韓国を併呑した1910年から100年目にあたる。不幸な日韓の歴史関係における節目の時期ともいえる

この年に、近代日本が行ってきた様々な暴圧的軍国主義政策の実態を相互が共有する事も必要だが、その桎梏の中でも命をかけて国家暴力に抗い、平和社会を渴望した人々の勇氣ある行動について考える事は過去の傷を癒し、説得力のある和解のプロセスを可能にする希望を内在している有意義な事である。暴力と差別行為が蔓延する社会でそれに反対を表し、抵抗した動きを認識し合う事は、未曾有の犠牲者を時代に葬ってきた国家大罪に対する責任や戦争犯罪を曖昧にしてきた日本の近代史を、人類普遍的視点からの侵略戦争史の総括へ向かわせる地球市民の叡智を試す希望の契機へと繋がる。それは今

* 東京学芸大学教育学部准教授

後起こりうる不幸な歴史の反復を許さない強い平和のうねりとなり、日本はもちろん、アジアや地球全体の秩序と安定を希求する市民層の構築と連帯意識を高める時代の灯にもなるだろう。

本稿は近代日本が行った武力統治の歴史の中で苦しんでいた民衆（植民地の人々を含む）を擁護し、暗黒社会の中でも一抹の希望を見出そうと苦闘した人物の中でも、国境を越えた人道主義的市民連帯を訴えた山本宣治や中西伊之助を中心に考察し、当時の朝鮮とどのような関わりを持ったかについても触れてみる¹⁾。

1. 尹東柱の日本最後の写真と宇治

最近、韓国や日本、中国はもちろん、アメリカ、オーストラリアなどで‘平和の象徴’‘抵抗詩人’として高く評価されている尹東柱が京都に留学中、学友らと訪れた宇治川の天ヶ瀬吊り橋で撮った日本での最後の記念写真が話題になっていること²⁾から、宇治で「記憶と和解」を趣旨にして発足された詩碑建立委員会³⁾の長い間の詩碑建立のための苦闘とその活動様子に心打たれたのが本稿執筆の契機となった。また、植民地朝鮮で起きていた凄惨な植民地統治状況を日本で初めて本格的に小説化し、武力支配の実態を告発した中西伊之助が宇治出身である事に着目したのも執筆の一因である。

尹東柱は1917年12月30日、当時の満州北間島（現在の中国吉林省）の明東で生まれ、生涯の運命をともにする従兄弟の宋夢奎（1917～1945）とともにソウルの延禧専門学校（現・延世大学の前身）を経て、より高度な詩文学を勉強しようと日本に留学するのである。立教大を中退し、当時京都帝大に在籍していた従兄弟の



写真1 東京学芸大学の尹東柱追悼文化祭に寄せられた宇治川の説明図や各種祝辞、宇治川図の作成は詩碑建立委員会の紺谷延子氏（撮影：筆者）

いる京都の同志社に留学するものの、朝鮮語詩を書いた事を理由に従兄弟の宋とともに治安維持法の嫌疑で逮捕され、1945年2月16日に28歳で福岡刑務所で命を奪われ、従兄弟も翌月に同所で獄死した⁴⁾。尹東柱の死後に発見された作品は平和を切願した純粋無垢な叙情詩が多く、韓国では国語の教科書で紹介され、彼の「序詩」は日本でも広く知られている。その訳文の一つを紹介しておく。

序詩

死ぬ日まで天⁵⁾を仰ぎ 一点の恥もなきことを、
草葉にそよぐ風にも わたしは心苦しんだ。
星をうたう心で あらゆる死するものを愛せねば。
そしてわたしに与えられた道を 歩みゆかねば。
今宵も星が風に吹き晒される。

私事で恐縮だが、筆者は現在近代史や人権教育を担う立場から、武力・差別のない平和教育の実践的活動の一環として、留学の夢さえ果たせなかった尹東柱の死を通して学舎の意味を再

認識すべく、毎年尹東柱の追悼を兼ねた文化行事を主催している。また、中西伊之助は筆者が追究し続けている朝鮮プロレタリア芸術家連盟のKAPF結成に多大な影響を与えた人物として関心を持っており、中西の没50周年記念式の基調講演に招かれて宇治の中西緑の地を訪ね、中西と朝鮮との関わりに触れた記憶がある。

さらに、非戦の立場から平和活動に努めつつ、バートランド・ラッセルと湯川秀樹らと共に1955年にロンドンで人類のために戦争・核爆弾廃絶を訴えたアインシュタイン⁶⁾がかつて京都を訪問した際に彼と会合し、日本社会の進むべき方向に平和的姿勢を明確にした山本宣治も宇治の地で育った一人である。在京韓国人学生によって組織された京都学友会が1926年6月に創刊した『學潮』創刊号には宇治の山本宣治が主宰する『性と社会』の広告や附録に「或画の話」が掲載された。同誌には、アインシュタインやラッセルらが参加していたフランスの国際反戦知識人運動であったクラルテ運動⁷⁾の趣旨を理解して京都の岡崎で『クラルテ』誌を発行し、のちに同志社大学の総長にもなった住谷悦治らも原稿を寄せている。さらに、同志社に留学中であった韓国の国民的詩人として好かれ、尹東柱が憧憬して同志社に入る契機となった鄭芝溶⁸⁾（1902～1950）が「カフェ・フランス」や詩調（朝鮮固有の詩）・童謡を載せている。また、のちに尹東柱の出身校である延禧専門学校でハングル学教授を務め、朝鮮語学会事件⁹⁾で3年間の獄中生活を経て、解放後は同大学副総長としてハングル普及に尽力した崔鉉培（1894～1970）も「気質論」を載せている。そして、尹東柱が逮捕された嫌疑も朝鮮語使用による治安維持法違反であり、結果的に異国での留学の夢は破れ、北間島の故郷に生きて戻ることはな

かった。

本稿では上記で述べた全ての人物論や彼らの関連、出会いの過程を論じるには紙面上の限界があるため割愛することとし、「宇治」の地で時代や民族を超えた平和思想を貫いた山本宣治、中西伊之助を主に考察しながら、尹東柱が日本最後の記憶を残した宇治の土壤を考えてみることにする。

ちなみに、学生時代、宇治を通して京都に通学していた筆者は、宇治は日本の精神的故郷である古都京都に近接し、多くの仏閣神社や文化財が散在し、宇治川が流れるのどかな文化都市だと認識している。韓国関係では近代史の負の歴史としてウトロ地域が生きた証拠として残っている。一方、世界遺産として知られ、日本の10円玉を飾っている文化財の平等院がある。平等院は平安時代の後期の11世紀に建築されたとされる本尊が阿弥陀如来で、その梵名は「アミターバ」(amitaabha)ともいい、「無限の光をもつもの」を意味する。つまり、世相をあまねく照らす光としての仏を意味すると解釈できるが、近代の歴史社会論や平和学・国際人権教育を担当する筆者としては、「光＝真実＝希望」「平安・平等」という言葉や人物との関連性に強く興味を抱く。長い間、知識人の社会的責務とは健全な社会機能と人類の国境を越えた平和的出会いを促す事や、社会のあらゆる出来事やその真実を伝える役割にあり、その真実を「光＝平和」の概念から追究している筆者としては、宇治という土壤が生み出した山本宣治や中西伊之助の存在と、死後に発見された尹東柱の宇治川での写真に強い巡り合わせのようなものを感じる。即ち、9・11テロ以後に起きている様々な戦争・紛争・異常気温・激しい天候変動・原因不明の伝染病・新自由主義経済市場の

拡大による格差社会が世界に広がっている現在、明日を紡ぐ平和を渴望し、時空を超えた出会いとしか考えられないのである。

そういう私見も踏まえながら、宇治が育んだ山本宣治と中西伊之助の二人の人物の生い立ちや活動、朝鮮との関わりを探りつつ、暗い時代を乗り越えて悠久に流れる宇治川のほとりで尹東柱が希求した平和を改めて考えてみることにする。

2. 山本宣治、宇治に育つ

山本宣治は1889年5月28日に京都新京極のクリスチャン夫妻の亀松とタネの一人息子として生まれた。仏閣神社と古い伝統の漂う京都の町で商売人の一家がクリスチアンだという事は珍しく、当時は話題になる時代であった。特に父親の山本亀松は結婚前に酒色に溺れながら家庭環境に反抗した放蕩息子であったが、人形のように扱われる事に限界を覚えていた足袋屋の娘・安田タネと四条教会で出会って恋に落ち、厳しい両家の反対に遭いながらも教会結婚を挙行し、悔い改める人生を誓った¹⁰⁾。紆余曲折で新京極の町に「まけぬというたらほんまにまけぬ堂 ONE PRICE SHOP」という屋号で花かんざし屋を営む際、子どもが生まれたので、宣教師の宣の一字と明治の治をつけた「宣治」と名付けるのである¹¹⁾。四条教会で洗礼を受けさせた一人息子の宣治を抱えて商売に尽力する夫妻は、憲法発布・帝国議会開催・日清戦争直後の京都勧業博覧会開催など、戦勝雰囲気と博覧会開催が醸し出す好景気によって資産を備蓄することになり、病弱の宣治のために当時国鉄奈良線が開通して便利になった宇治川のほとりの約600坪の土地を買い入れ、別荘を建てた。だ



写真2 山本宣治が育った花やしき（撮影：筆者）

が、内村鑑三の『東京独立雑誌』を愛読する少年宣治は肺病を患って神戸第一中学を中退し、両親が建てた宇治川畔の別荘で花づくりをして育った¹²⁾。そして、日露戦争などで商売の景気も悪くなったため、他の商売を閉めて、宣治も成長していたため、その別荘を料理旅館の「花やしき（のちの‘花やしき浮舟園’）」として発展させることにした。

豊かな自然環境で育った宣治は園芸家を志して東京興農園や大隈重信邸で園芸の見習いをする傍ら¹³⁾、戦争の理不尽さに目覚めるのである。そして、実家の料亭に来ていた遠縁でカナダのバンクーバーで眼科医をしていた石原明之助の勧めで園芸を本格的に勉強するために1907年にバンクーバーに渡るのである。そして、労働生活の必要性を意識して皿洗いやコックの見習い、園丁、新聞配達、漁夫など二十数種の労働生活の中で『種の起源』『進化と倫理』などを読み、ブリタニヤ・ハイスクールに入学し、生物学と生命の関連性に興味を抱くのである。また、1910年5月に起きた大逆事件によって翌年の1月に幸徳秋水を含む多くの若者が処刑された事に接し、「(前略)天皇であろうとも、命令によって人間を殺すことは、生物進化の大原則

に反することなのだ……この法則に反することが行われるとき、自分は生物学者の卵として、かつは若いクリスチャンとして、断じて反対しなければならない……」¹⁴⁾と憤慨し、命の尊厳と平等性を強く認識するようになった。さらに、日本が1910年8月22日に韓国を強制併合した事について、「Aug. 29. Mon. 'Korea is annexed to Japan at last. It is proclaimed on this very day.」¹⁵⁾と英文日記に記すなど、日本の横暴な動きに批判的意識を抱きながら進学についても葛藤していた。その際、父の病気を知らされ、1911年に5年間の異国生活を終えて帰国する。その後、同志社中学を経て第三高から東京帝大動物学科で修業する時には米騒動やシベリア出兵の時代を東京で経験し、京都帝大大学院で修学し、生物学者として同志社大学や京都帝大の講師を務めながら性教育啓発に尽力するのである¹⁶⁾。そして、当時、社会的・政治的に叫ばれていた「生めよ殖やせよ」策には反する産児調節運動の必要性を感じ、1922年に京都を訪ねたサンガー女史と都ホテルで産児制限について語り合った。また、宣治はニコライの『戦争の生物学』の訳書の序文を頼むために同年12月10日、平和運動にも力を入れていたアインシュタイン夫妻が泊まっていた都ホテル¹⁷⁾をまた訪ねて行った。そして、無意味な戦争を防止するための国際的組織の必要性を普及する任務を述べた訳書の推薦文を書いてもらった¹⁸⁾。戦争によって無数の人々が犠牲になっている不条理な出来事に対する反戦人道主義者としての認識は相通じていた。

3. 山本宣治と『學潮』からみる朝鮮留学生

宣治はさらに多産と貧困の構図問題について

喝破し、貧しい労働者や農民に産児調節の知識を提供し、人々からは山宣という愛称で呼ばれた。そして、総同盟など社会主義労働運動組織や農民団体の集まりなどで産児調節と女性は子どもを生む奴隷ではない事¹⁹⁾を指摘し、階級社会の差別的な社会構図の問題を積極的に訴えながら全国各地を廻り、新聞や雑誌、ラジオなどのメディアで持論を展開した。また、寸暇を割いて『産児調節評論』（後に『性と社会』と改題）を発行する一方、関西労働学校連盟委員長と京都労働学校校長も引き受けて、社会運動や小作争議の指導にも関わっていた。この時期に京都に留学中の韓国人学生らとも交流を交わし、1926年6月に京都学友会が創刊したハンゲル交じりの『學潮』誌に宣治は「或画の話」（134～136頁）を附録として載せている。さらに、創刊祝いとともに、『性と社会』が産児調節評論改題だという広告も載せている事から、広告の経済的支援もあったと考えられる。

宣治が京大や同志社大学の講師を務めながら原稿や創刊祝いの広告を寄せていたこの雑誌の最初を飾った「気質論」は同年から延禧専門学校でハンゲル学を教え、1941年の朝鮮語学会事件に巻き込まれ4年間の獄中生活を余儀なくされた崔鉉培である。崔は1894年に慶尚南道の蔚山²⁰⁾で生まれ、京城普通学校と朝鮮語講習院を経て1919年に広島高等師範学校を卒業後、京都帝大の文学部を卒業している。この崔から『国語文法』を受講した尹東柱はいつも前に座って熱心に聞いていたという²¹⁾。さらに、韓国の国民詩人として評価される鄭芝溶も当時、同志社大学英文学科に在籍する傍ら、「カフェ・フランス」などの作品を掲載している。鄭は尹東柱にとって憧れの存在であり、尹東柱が同志社大学を決心するには鄭への憧憬もあった。ち

なみに、尹東柱の死後の1948年1月に出版された遺稿詩集『空と風と星と詩』の初版に鄭の序文が書かれており²²⁾、宣治が創刊祝いと原稿を寄せた『學潮』には尹東柱と関わりの深い人物が二人もいた事になる。なお、『學潮』に宣治以外に載った日本人として住谷悦治がいるが、住谷は東京帝大法学部政治学科に入学し、新人会²³⁾で吉野作造の指導を受けながら河上肇の著作を読破し、1922年から同志社大学助手を迎えられ、1925年4月に京都岡崎で文芸同人誌の『クラルテ』を発行している²⁴⁾。この『クラルテ』は第一次世界大戦後の反戦国際知識人運動として1919年にフランスで結成されたクラルテ運動に影響を受けて付けた名称であり、1924年4月に小樽高等商業学校を卒業後、北海道拓殖銀行の小樽支店に勤務する傍ら文芸同人誌の『クラルテ』を発行していた小林多喜二より1年後の発行になっている。京都『クラルテ』には住谷の社会科学論やフランスのクラルテ運動を紹介した『種蒔く人』の中心メンバーであった小牧近江、麻生久、新人会の河野密、のちに兵庫県知事になる坂本勝などが執筆している²⁵⁾。

学生連合会の招待で東大や早大で性科学の講演を行った時から親しくなった進歩的政治学者の大山郁夫（宣治の死後、彼の墓碑銘を書いている一筆者注）らが展開していた軍事教育反対運動にも宣治は共感を抱き、治安維持法にも強く批判的姿勢で臨むのである。学生たちの軍事教育反対運動が展開された背景には小樽高商で行われた学生野外演習の想定の内容の暴露があった。その内容には特に、「(二) 無政府主義者団は不逞朝鮮人を煽動し、此時機に於て札幌および小樽を全滅せしめんと小樽公園に於て画策しつつあるを知れる小樽在郷軍人団は、忽ち奮

起し、これと格闘の後東方に撃退したるが、敵は汐見台高地の天険に拠り、頑強に反抗し肉飛び骨砕け鮮血に満山紅葉と化せしも、獅子奮迅一步も退かず、ために進撃は一頓挫するに至れり。(後略)」²⁶⁾となっていたため、1923年に罪もない同胞らが流言蜚語で6,000人以上も虐殺された関東大震災²⁷⁾の悪夢が蘇る事を懸念した小樽港の積荷人夫3,000人の朝鮮人労働者が憤激するのは当然であった。さらに、国内の階級闘争を圧潰し、植民地では弾圧を強行しようとする軍部の意図を露骨に示した事に対し、全国の日本の学生団体などは猛烈な軍事教育反対運動を展開したのである²⁸⁾。そういった暴圧的行為に対する批判や産児制限運動、反戦を唱えながら日本農民運動や政治集会にも積極的に参加していたため、宣治の言動や社会的影響力を懸念した官憲には危険人物として注視され、乱暴な家宅捜査を受けるようになる。そして、宣治の発言や存在性を抹殺するために彼を講演会の弁士中止事件から京都帝大を、所謂京都学連事件では同志社大を追放され、理不尽な追放理由に対する宣治の持論や抵抗は認められる事がなかった。

教壇で教える機会を奪われた宣治は佐山村の農民闘争などを支援しつつ、政治的活動を通して人道主義思想の実践を展開するのである。地下雑誌の『インターナショナル』の発行人を引き受け、労農党员として頑張る宣治は、田中内閣が山東出兵という名目で中国侵略を行った事に抵抗し、対支非干涉同盟の委員長をつとめるとともに、1927年8月に中国派遣団団長に推されたが、「警察は、山宣以下、野田律太（評議会）、上村進（弁護士。俸給生活者同盟）、松本治一郎（水平社）、金荒波（在日朝鮮人）や地方代表を検束、拘留して渡航を妨害した。」²⁹⁾の

である。この計画は、「労働農民を中心として、これに日本のために植民地化された朝鮮の労働者や、さらに封建的な身分差別と闘っていた水平社同人などが加わって、『支那視察派遣団』の運動が計画されていた」³⁰⁾ のであり、既に政府では軍部と外務省を中心に満蒙権益と居留民保護の名目で対中国政策を行おうとする《東方会議》³¹⁾ で《対支政策綱領》を決定していた。

理不尽な検挙から釈放された宣治は、精力的に活動する傍ら、1928年の第1回普通選挙で労働党の代議士となった。そして、帝国議会で治安維持法の絶対反対の苦闘を行った。その徹底ぶりに知人たちからも懸念の意をしめしたが、1929年3月5日の夜10時を超えた時に彼が泊まっていた神田の光栄館を訪ねてきた殺し屋によって刺殺された。

義侠心と正直さと人道主義思想を貫いた宣治は治安維持法が日本やその植民地の多くの民衆をどれほど苦しめ、弾圧するのか、帝国侵略の武力的対応を許す事が出来なかった最後の抵抗に対する愚かな勢力の判断であった。宣治の先見性が無視され、戦争を強行した日本の愚行は、敗戦から65年経っても今なおその総括には至っておらず、周辺諸国家との歴史的和解に

座礁しているのが現状である。一国の一方的な歴史解釈による乱暴な戦後の展開によって近代史の総括はますます複雑になっている昨今、それらを解く糸口として宣治の人類普遍的な生き方とその一途な市民思想を活用することが期待される。

4. 中西伊之助の生い立ちと社会活動

中西は1887年2月8日に久世郡檳島村（現在の宇治市）で生まれ、生涯を通して作家・社会運動家・政治家として活躍し、1958年9月1日、71歳で亡くなっている。複雑な家庭事情から両親と生別し、母方の祖母に育てられた中西は、早くから労働現場で様々な体験をし、その後、朝鮮で得た情報などをもとにした小説で社会に説得力のある無産労働者や民族差別の告発を行った。その点、ジャーナリストックに現状や事実を「伝える使命」に徹する使命を持って社会運動に参加し、不条理かつ凄惨な差別と偏見について告発した人権主義者として評価することができる。その生い立ちから活動までを見てみよう。

中西は貧農の息子として生まれ、家計を助け



写真3 山本宣治家のお墓（撮影：筆者）



写真4 宇治の中西伊之助顕彰プレート（撮影：筆者）

るために早くから陸軍の宇治火薬製造所などの軍関係の工場や機関車の掃除夫として働いた。向学心を抑えきれず、少年工として学費を貯めて1905年に上京し、大成中学校5年に編入。キリスト教と社会主義に傾倒する傍ら、21歳まで車夫、新聞売り、おでんやなど、多種多様な労働を経験している。徴兵された陸軍工兵隊から戻った中西は、23歳になる1911年に再婚した母を訪ねるために朝鮮半島に渡るが、そこで見た母の姿は朝鮮人を相手に麻薬を売る姿であった。すでに貧困と差別、偏見に対する批判的意識が高っていた中西は、「母と植民地朝鮮の人」の構図を通して衝撃かつ幻滅を覚えるようになる。この点は注目すべきところがある。つまり、中西がのちに積極的に朝鮮とかかわっていく要因の一つとして、この極めて衝撃的だった母の姿と植民地朝鮮の惨状から良心的呵責が見出されたと考えられる。中西は母への憧れが崩れ、植民地政策の下で苦しむ朝鮮人への罪意識は高まり、これらがのちに朝鮮への強い関心として繋がったと言っても過言ではない。

1912年に日本人経営の『平壤日々新聞』の記者として働くのだが、初代朝鮮総督の寺内正毅総督の実態を批判したり、朝鮮で鉱山を営む藤田組の日本人労働者への搾取を暴露したため信用毀損罪で投獄され、4ヶ月の実刑となり、監獄での体験、植民地支配の実態、朝鮮人の苦しみを身をもって感じるようになる。その後、1915年に中央大学を中退し、翌年に満鉄に入り、1917～1921年間は『鉄道時報』の記者になる。その間、社会の不条理を訴えるべく、1919年の9月に東京で「日本交通労働組合」を組織し、1920年2月には「日本交通労組」を中心に東京市電ストなどの労働運動に参加し、治安警察法の違反で収監された。労働組合の結成

もなく、過酷な労働状況におかれていた鉄道労働者のために交通労働組合を結成した中西は、初代理事長として労働者の待遇改善などを内容に労働争議を指導し、収監されるのである。出獄後の1922年に中西は、朝鮮での体験とその生々しい鉱山労働者への搾取を綴った『緒土（あかつち）に芽ぐむもの』を発表して文壇デビューし、植民地支配下の朝鮮人労働者への差別と虐待を訴えながら社会運動に加わるのである。

『緒土に芽ぐむもの』には農民の金基鎬と日本人新聞記者の槇島久吉を登場させ、日本の土地収奪政策（土地調査事業など）の中で農地を取られたあげく、殺人を起こした死刑囚の生き様やその背景を聞いて、民衆のために闘っていくべきだと悟る槇島の決意を述べており、著者本人の姿が投影されている。その後、中西は朝鮮の実情および朝鮮の植民地解放運動に尽力する運動家を描いた『汝等の背後より』や『農夫喜兵衛の死』、『不逞鮮人』、『死刑囚と其裁判長』などの作品をつぎつぎに発表し、名実共にプロレタリア文学作家として位置づけられるようになる。

その後、前述した参戦作家アンリ・バルビュスらの国際反戦知識人運動クラルテ（Clarté）運動に触発され、1921年に「国際主義、平和と反戦、人道主義」を趣旨に創刊された文学同人誌の東京版『種蒔く人』（秋田版は第3号で廃刊）に共感を覚えていた中西は1923年4月に同人となるが、『種蒔く人』が内部葛藤や関東大震災などによって解散し、新たな体制の文学同人誌として1924年6月に『文芸戦線』が創刊されたので、中西は東京の代々木山谷425番地付けの住所で雑誌の発行人・編集人・印刷人を担っている。積極的に同人活動をしているのがわ

かるが、筆者が所有する『文芸戦線』の概括を
すると次の通りである。

創刊号には中西の著書『一人生記録』の広告
(66頁)に、「無産解放運動家の闘士たる中西」
と評されて載っており、見開きには中西を含む
12人の同人の似顔が柳瀬正夢によって描かれて
いる。また、同誌には関東大震災の際に虐殺さ
れた友人の平澤計七の遺著『一つの先駆』を勧
める文章を書いている。1巻2号には創作「朝
顔を作る男」が載っているが、作品性が気にな
ったせいか、「秘術の説明が足りないかも知れ
ない、が、それは法律が許してくれない。」と述
べ、当局の検閲が厳しいことを示唆している。
3号には堺利彦の『野外劇的一幕』(16頁)が紹
介され、大阪市電ストへの感想を書いた『階級
戦のどん底より』(18～19頁)が紹介され、同誌
では大阪市電従業員争議犠牲者同情金募集を行
っている。ここでは、はじめて林芙美子（下関
出身）が女工の実情を紹介している。4号では
短い小説「屋根裏から微かにもれる言葉」(37
～38頁)を書いて、人類の愛と憎しみについて
表現している。1925年1月の第2巻第1号から
は高円寺の佐々木孝丸が編集人になっている。
第2巻3号では支那人労働者の過酷な状況を語
った「苔の下より起つ」(30頁)が掲載されてい
る。第5号にはプロレタリア文学は「现实生活
に対する実証主義であるべき」(4頁)だと力
説し、6号には都会ブルジョアに対する農村青
年の怨嗟を描いた長編小説の『この罪を見よ』
の広告が載り、8号には「四本の煙草」(2～6
頁)の中で新聞記者時代に尋ねた煙草工場で負
傷した労働者たちの指のアルコール漬けを通し
て仕事の実態を告発している。第3巻第7号で
は農民自治会の組織や日本国内の実情について
語った「農民自治会に就て」(37～38頁)を述べ

て自治会の組織に対する問い合わせ先を淀橋の
中西宅宛にしている。ここからも中西の社会運
動への意欲が現れていることが察知できる。8
号では7号の『文芸戦線』の発行・編集人にな
っていた山田清三郎を励ます「Yに贈る手紙」
(43～46頁)が掲載されている。9号では埼玉
の小作農夫の詩集『野良に叫ぶ』の書評(22頁)
と中西を攻めている「山路眞市君へ」(59頁)が
掲載され、自分らの苦悩が記されている。そし
て、1926年11月に発行された第3巻第10号には
いよいよ理論的論争が見え、水野正次が中西に
対して「老ひたるサンヂカリストの老婆心」だ
と述べたことに対する反発と彼の理論的論拠の
位置づけを明らかにした「日本を見よ—水野君
へ—」(61頁)を掲載している。その後、中西は
『文芸戦線』を脱退する動きを取ったと考えら
れるが、それまでに発表してきた内容は社会各
層の労働者問題や植民地社会の実情について訴
えたことが多く、自分の体験から説得力のある
文章を精力的に表現していたのがわかる。な
お、プロレタリア連盟は1926年11月10日に第2
回大会を開き、マルクス主義に徹しない加藤一
夫、谷一、江口渙、中西伊之助らを除名するに
至った。

なお、中西は人権弁護士として知られる布施
辰治の指導を受けながら二人の共著で『社会随
筆審くもの審かれるもの』(自然社、1925年)を
発行し、司法制度と法実情について論じてい
る。また、農民運動を支援する傍ら、1928年
には無産大衆党の幹部として活躍した。1929年12
月には東京無産党の委員長に就いて、総選挙に
も立候補した。中西の社会的意識は貧弱者や無
産労働者の生活向上など、強圧的愛国主義が氾
濫する総力戦の下でも自分の信念を貫きながら
社会運動に徹した。さらに、戦争の実態を批判

した『満州』や『軍閥』といった小説を発表しつつ、1937年12月には「人民戦線事件」で収監されながらも、戦時下における反戦主義立場を貫いた。そして、日本の敗戦後はいち早く国境を越えた、いわゆる地球市民の文化的市民連帯を意図とした『人民戦線』誌を発行したり、部落や民族差別・性差別の撤廃を訴え続けた。

中西は日本共産党の衆議院議員を二期務め、1958年に神奈川県藤沢市で闘いの生涯を終えている。

5. 韓国の近代文学運動と中西伊之助

中西は朝鮮での経験から得た内容を初めて小説化し、日本に紹介した事で知られるが、韓国の近代文学運動においても歴史的人物である。特に日本の弾圧に耐え切れず、民衆運動として広がった3・1独立万歳運動を境に、国や民族を超えた社会的・階級的連帯の実践のために文学者や社会運動家らとともに幅広い交流を行うのである。『東亜日報』の初代主幹であった張徳秀らとマルクス主義研究会を行ったり、朝鮮各地で多様な交流を行った。また、朴烈・金子文子夫婦との交流もあげられるが、朴烈は『種蒔く人』を創刊した小牧近江や同人らとも交流を持ち、一緒に炭鉱争議での活動なども行っている。

一方、1923年9月1日に起こった関東大震災の際、それまでに「要視察人」とされていた無政府主義者の朴烈と同棲していた金子文子の二人は大逆罪で「保護検束」となると、家も近くて思想的に共感していた中西夫妻は、二人のために差し入れを入れたり面会を行った。金子文子が自殺した後、その遺骨を出迎えるために中西の妻ゆきこが池袋駅まで出掛けている。な

お、1923年9月1日に起こった関東大震災の際に虐殺された6661名の朝鮮人狩りを行った日本の野蛮的当局の行動に憤怒を覚えた中西は、早速『婦人公論』で「朝鮮人のために弁ず」を発表する。

「私は敢えて問う、今回の鮮人暴動の流言蜚語は、この日本人の潜在意識の自然の爆発ではなかったか？ この黒き幻影に対する理由なき恐怖ではなかったか？」「朝鮮民族は、平和の民であります。」「朝鮮は芸術の国であります。東洋の形象美術は、むしろここにその発祥を為したものであると申しても、決して過言ではありません。」「朝鮮人は、親しみやすく、相愛しやすい民族であります。……日本人の考えているような狂暴の民族性はどこにも見る事ができないのであります。」「私は日本人に対して決して多くを望みません。愛すべき同胞として信ずべき朋友民族として、あの美しい半島の人々を、親切な心をもって理解してもらいたいです。」（『婦人公論』1923年11・12月合併号）

国家暴力の恐ろしさは非常時に生まれやすく、その残虐さを表すのは山本宣治が憤慨した大逆事件を見てもよくわかる。その事を重々知っただけでなく、憤怒を公に表出した中西の態度は当時、どれほど勇気のある行動であったかは簡単に推察できよう。

一方、当時の韓国社会には伝統的儒教社会における様々な階級問題と差別、抑圧に、新たな日本の植民地政策による弾圧など、多重の抑圧に苦しむ同胞らを解放すべき手段として文学活動が盛んであった。さらに、国際主義的社会運動を支持する青年（留学帰り）らを中心に、民族意識を鼓舞するプロレタリア文学運動と演劇

などが展開されるようになった。特に東京の神田周辺で留学中だった金基鎮や朴英熙らは朝鮮の悲劇的歴史を目の当たりにし、民衆の自決意識を周知させるために初の新劇運動である「土月会」を結成³²⁾し、1923年5月に帰国して、韓国のプロレタリア文芸運動を展開するのである。中でも、社会主義思想や労働文学（麻生久）に傾倒していた金基鎮は中西の『楮土に芽ぐむもの』から芸術至上主義のカテゴリーから藻掻いていた自分を反省し、影響を受けるようになる。金は東京に留学し、四ツ谷のアテネフランセに通ったり、立教大学予科で勉学する過程で『種蒔く人』に影響され、中ではアンリ・バルビュスとロマン・ロランの論争を通して文学者の社会的役割に目覚めるのである。そして、文芸運動団体のPASKYURAと焰群社の統合を通して確固たる文学思想活動を展開しようとし、1925年8月23日に朝鮮プロレタリア芸術同盟（KAPF：Korea Artista Proletaria Federation）を結成するに至る³³⁾。その時に招かれたのが中西と奥ムメオであった。両団体の統合結成は中西の講演会直後に行われており、KAPF結成に中西が影響を与えていることは否定できない。それほど中西の説得力のある朝鮮理解に文学者・思想活動家たちは心情的に親近感を抱いていたといえる。

日本人としてはじめて植民地朝鮮の実情を批判的に描いた作家を招いた背景には、帝国主義権力に抗うための国際的連帯闘争が必要であるという文壇・思想団体の考えがあり、その必要性を意識した中西の二度目の韓国訪問でもあった³⁴⁾。事前に各新聞には中西歓迎記事が掲載され、1925年8月15日の『東亜日報』には、「思想運動の闘士 中西氏と奥女士、思想大講演会の演士として 市内斎洞の85番地にある火曜

会、朝鮮労働党、無産者同盟、北風会の四団体連合が中西伊之助氏と奥ムメオ女史を招き、思想大講演会を開くという朗報である。」と報じられている。

中西の講演会は8月15日はソウルの鐘路青年会館で、翌日は公会堂で行われたが、公会堂での講演の際、宗教的批判を行っていた中西に蛇の刺青を入れた国粋主義の日本人が叫びまわったので朝鮮の各紙に有名な出来事として位置づけられた。その後、金基鎮や朴英熙、宋影、金永八、李益相、李浩らは中西を囲んで座談会を開いている³⁵⁾。かねてから勇気ある良心派文学者として親しまれていた中西だったが、その座談会では朝鮮人を「土人」と表記したのが発端で、差別的用語に対する批判と軽い喧嘩となった。趣旨はそうではなかったことを弁解し、思想理念による文化的芸術的連帯を確認する歓談会となった。

こうして、中西は金基鎮、金復鎮、朴英熙らによる実践主義文学者の行動論が高まり、社会主義階級意識を青年知識層と労働者農民層に普及させようとするKAPF結成に関与した初の日本人作家となった。そして、彼の講演会などを通して朝鮮の文学者や思想活動家は、警察の注意や過激派の対応にも逞しく自分の意見を貫徹する中西の行動や信念、作品などに勇気づけられ、既存の文壇になかった強烈な刺激となった。

まとめに

以上、宇治という土壌で涵養したヒューマニズムに基づく思想的信念を愚直に貫いた山本宣治と中西伊之助について考察してみた。そして、彼らが活動した背景には、巨大な国家権力

が秩序なき暴力行為で人々を弾圧していた社会状況があり、国境を越えて人々を苦しめる各種差別と暴圧撤廃の為に必死で闘っていたのが垣間見ることができる。

自然を愛し、人々の生活を案じた彼らは貧困と差別、過酷な労働、搾取、多産、非人間的賃金の背景にある特権層の利潤と国家・軍部・財閥等の繋がりをいち早く喝破し、それらの改善と反戦や社会改革に尽力した社会の良心であった。そこには彼らが反対していた治安維持法の嫌疑で逮捕され、自然を愛し、平和な社会を渴望した尹東柱らの死を阻止しようとした彼らの良心的行動で一貫した人生があった。その点、少子化・核家族化ゆえの物質的・経済的豊かさによる自己中心主義が蔓延し、他者に対する無関心と社会に対する責務を担う人が希薄の現代社会に、行動でもって差別や暴力のない人間的共生を率先して行動で示した彼らの生き様は、戦争や植民地支配によって生じた怨嗟を払拭し、歴史総括に歩み寄れる友情の鍵として生かすことができよう。

「他国の貪欲な侵略を受けて自前の国家を失い、他国に組み込まれてしまって自決権を奪われた人びとも多い」³⁶⁾ 植民地の歴史を考えると、被害者の苦しみが癒されない限り歴史の総括は出来ない。

一例であるが、筆者と『図書新聞』が共同企画し、2010年4月10日から始まっている「証言

日本の『韓国併合』100年を掘り起こすシリーズ」に登場するかつての従軍慰安婦の生存者や戦時中強制連行労働者らの憤怒や鬱積、言葉に出来ない記憶の苦痛を聞くだけでもどれほど苦しんでいるのか、癒えていない現状がわかる。そういった戦争暴力の犠牲者らの苦しみを癒す記憶の空間と、和解のプロセスが同時に用

意されなければならない。そして、桎梏のあの歴史の中でも植民地の人々と連帯し、悪法に向かって闘った友がいたことを伝え、共に人類史の側面から不幸を繰り返さない事を認識し、記憶の共有と活用を残さなければならない。そういった努力によってこそ被害者の抹殺された青春の傷が少しでも癒され、加害者側も歩み寄れる道が出来るのである。

2010年3月1日、韓国天安の独立記念館で行われた3・1独立万歳運動91周年記念式典の様子を韓国のTVで見っていたら、李明博大統領が「過去にとらわれることなく……日本に過去の過ちを追求せず、寛容と擁護の精神で」未来を考える姿勢で世界共栄に寄与することを強調していた。暗い過去にとらわれることよりも急変する競争社会を直視し、国際社会で活躍する人材育成をもって国家発展に拍車をかけたい趣旨の発言であり、日本側にかなり歩み寄ろうとする譲歩の姿勢が見られた。しかし、その寛大な姿勢は加害側に和解のプロセスが整備され、被害者らが受けた凄惨な状況を吐露し、記憶する空間が存在し、戦時中に受けた傷跡を治癒できる環境が整ってから言うべき内容ではなかろうか。和解とは、苦痛を抱いて生きてきた戦時中の犠牲者やそのために代々で貧困と劣悪な生活を強いられてきた遺族関係者らに対する配慮が行われ、犠牲者やその遺族らがある程度の譲歩の気持ちになって歩み寄れる信頼関係が構築されてこそ可能になるはずである。そういった両者間の和解を難しくしてきたのは、「過ぎ去った歴史が積み上げてきた数々の度重なる悪縁と、それらの悪縁を必要に応じて好き勝手に利用してきたこれらの二つの国の統治者や権力者たち、さらには一刻も早い和解と治癒が急がれる双方の間の憎悪と不信などを、どちらの場合

も国家的な次元で能動的に改善しようとする努力を、なおざりにしていることにある。』³⁷⁾と指摘しているように、寛大を装った外交策で曖昧な和解を急いだ場合、心の底に残っている痼りが両国の未来を築く際に地雷畑化し、さらなる歴史の悪縁を生み出す可能性もある。もっぱら、戦争に巻き込まれ人生を奪われた人々の生活をないがしろにし、その気持ちに対する配慮や生活保障なしに時代が済んだからといって忘れようとする、その鬱憤はいずれ別の政権や別の時期に反日的動きとなって突出し得る可能性がある。癒えてない人々の悲しみは人類普遍的なものである。李政権がそこまで歩み寄ろうとするなら、健全な未来作りのために政府側で犠牲者や遺族の苦しみを証言し、記憶する空間を広く設け、日本側の真摯な反省と対応を促し、相互の努力による戦後歴史問題の総括に向かう事が手順かも知れない。加害と被害がある場合、一方的な解釈では真の和解にはならない。

西川長夫は1995年1月の『群像』に載った加藤典洋の「敗戦後論」における彼の戦争の勝敗にこだわる事に対し、「日本国民を一つの人格として捉え、総力戦という国民戦争のイメージを受け入れているからだ。私も日本が行ったのは侵略戦争だと思い自分の負うべき責任を考える。だがそのような反省や行為をしようと、それは「日本国民としての誇り」や「矜持」をとりもどすためでは断じてない。むしろ自己を日本や日本国民と同一化して何ごとかを語りあるいは行うことだけは止めようというのが、私が戦争から学び、戦後文学を読みながら育ててきた考えであった。』³⁸⁾と持論を明確にしている。さらに、戦争に対し、「国家があれば戦争をやる。戦争には勝敗がつきものだ。だが良い戦争

なんてありうるだろうか。正義の戦争と見えたものはいつか侵略戦争に転化する、というのがこの二〇〇年あるいは五〇年の国民国家の歴史だろう。戦争はいつも国民を巻きこむ。国民はつねに加害者であり被害者だ。戦争責任を負うというのは究極的には、そのような国家を支える国民をやめるということだろう。「汚れ」は敗戦にあるのではなく、そのような国家と国民の存在自体にあるのではないか。（中略）誠実で道徳的な文章であればあるほど日本国民であることを強いる風潮は恐ろしい。非国民の受難の時代は続きそうだ。』³⁹⁾と論じている。

上記の西川論の発表から15年ほどの歳月が経っているものの、日本社会におけるかつての植民地統治や先の戦争に対する和解や記憶のための環境は決して未来志向的に進んでいるとは言えない。むしろ経済不況による格差社会の中で偏狭的ナショナリズムが高まり、自国の戦争を聖戦だと美化する動きさえ強まっている⁴⁰⁾。

誤った自国中心主義の排他的行為は情報・通信技術が発達している先端科学社会でもある現代では世界的孤立に追い込まれる可能性が多分にある。時代逆行による被害は明日を担う子どもたちにも及ぶ事を考えると、利己主義的ナショナリズムに甘んじる裸の王様のような発想は日本の国際化の為にも止めるべきだと促さなければならない。人類の移動が激しく、国境の超え方が極めて容易になっている昨今、協力し合い、共生への道を探らなければ国家維持は難しい現状になってくる。最も近くにいる信頼できるパートナーシップを得るためにもいち早く和解と共生のための両国の近代史総括への積極的な取り組みが必要である。その際、宣治や中西のように誤った時代に共に生きる事を考え、一緒に協力し合って時代を拓こうとした動きは大

きな友情の証となってくる。そして、その意を受け継いで、核廃絶平和都市を宣言し、人権尊重を掲げている宇治市でハンゲルの詩を書いたがために疑問の死を遂げて治安維持法の犠牲になった尹東柱を偲び、二度とそのような不幸な歴史のない事を約束する日本の市民たちが、『詩人尹東柱 記憶と和解の碑』を、縁の地の宇治公園塔の島に設置し、信頼を構築しようとする尹東柱記念碑建立委員会の動きは両国を繋ぐ試金石になるだろう。国や民族を超えた市民の普遍的平和社会の実現を切望していた宣治や中西、そして尹東柱の願いが決して夢ではないことを宇治市民の動きから感じ取ることができる。

なお、「詩人尹東柱記念碑建立委員会」の安斎育郎代表と紺谷延子事務局長、そして筆者ら11人の連名で2010年4月8日、京都地方検察宛に1944年3月31日に行われた尹東柱の訴訟記録や関連資料調査の申し入れを行った。その結果、同年6月10日にこれまでにないと言われていた治安維持法関連の判決文が見つかったという京都地方検察庁側の連絡が委員会宛にあり、学術研究が目的の特別措置としての資料公開が可能となった。画期的な事例だと言えるが、このように過去の真相を究明し、不幸な歴史によって生まれた怨嗟を少しでも払拭しようとする地道な努力こそ、国際化社会における市民間の信頼関係を築き、共に明日を紡ぐ近道になると言えよう。不幸を繰り返すことの愚行を阻止するにはまず、過去の真相を加害者側と被害者側が共有し、相互の歩み寄りへの努力が必要となってくる。そのため、差別のない人道主義精神を実践的に行ってきた山本宣治や中西伊之助はもちろん、美しい自然と民族を超えた人々の交流を大事にしようとする「詩人尹東柱記念碑建

立委員会」の平和を希求する精神は国境を超えやすくなっている現代社会に示唆するものが多い。

注

- 1) 日本の植民地支配下の朝鮮の民衆を擁護した他の日本の文学者として、石川啄木や内野健児、鶴彬、横村浩を忘れることはできないが、ここでは宇治出身を限定しながら、当時の時代意識や社会に対する責務、不条理に抗う識者の役割について考察する。
- 2) 筆者が東京学芸大学で主催する尹東柱の追悼文化祭が行った2010年2月20日に、宇治の「尹東柱詩碑建立委員会」の協力によって宇治川での写真や説明図が展示され、多くの参加者から好評を得た。
- 3) この委員会は2004年11月に国連総会で「第二次世界大戦終結60周年を記念する決議」を尊重し、日本が植民地統治を行った国々との「記憶と和解」の趣旨の一環として、2005年9月11日に発足された。事務局を担当する紺谷延子らの尽力で2010年4月現在、趣旨賛同者は12,000筆になっているが、宇治市は個人の顕彰を拒否している状況である。
- 4) 拙稿の「軍国主義の武力行為に抵抗した文学青年考察」『亜細亜文化研究』(第17号, 韓国Kyongwon大学, 2009), 「平和を希求し、武力に抵抗した文学青年考察」『東京学芸大学人文社会科学系 I』(第61集, 2010) で詳細に論究している。
- 5) 敬虔なクリスチャンであった尹東柱が仰いだのは神様の存在を意味する「天」として解釈する傾向であるが、儒教社会でもっとも崇拜されていた「天」として解釈した訳者もいる。
- 6) 1955年7月9日、ロンドンでアインシュタインの生前の意思を受け継いでラッセルやロートブラット、湯川秀樹らノーベル賞受賞者・科学者11人の連名で人類の存続のために戦争・核爆弾・大量破壊兵器廃絶を訴えるラッセル・アインシュタイン宣言が行われた。
- 7) クラルテ運動は第一次世界大戦に参戦し、

- 敵・味方を問わず殺し合っている戦場を告発し、知識人の社会的役割や人類は「人」という一種類しかいないこと、一部の特権層や権力側によって愛国の美名のもとで行われる戦争の事実を民衆に知らせ、真実(光明・光)に目覚めさせるように活動しようとする趣旨で1919年10月に結成された国際反戦運動である。なお、詳細は拙著の『近代韓国の知識人と国際平和運動』(明石書店、2003年、科学研究費成金による出版)、『帝国の狭間に生きた日韓文学者』(緑蔭書房、2005年、第9回日本女性文化賞受賞作)などで紹介している。
- 8) ちなみに、筆者は1999年3月に読売TVの『京の音』で鄭芝鎔の詩「鴨川」を京都で朗読・インタビューをした事がある。鄭は1902年に韓国の忠北の沃川で生まれ、1923年に同志社大学英文学科に入学し、6年間の留学をしている。
- 9) 1942年10月1日、『ハングル大辞典』の編纂をすすめていた朝鮮語学会の正会員33人が治安維持法の嫌疑で逮捕され、洪原警察に送られた事件。中にはひどい拷問などで獄死した者もあり、多くは2～6年の刑を言い渡された。この事件について、既存の日本の朝鮮近代史解釈が誤っていると指摘した山辺健太郎は、「この事件はどう考えても無茶なでちあげだが、日本の予防拘禁所にいた金天海のような人は、八・一五で朝鮮の独立を日本政府がみとめた後でも拘禁を継続するという裁判所の決定があつたくらいこのころの裁判は無茶であつた。」と述べているように、戦争末期になると日本は朝鮮文化の抹殺をはからいながら総力戦の奈落に向かうのである。山辺健太郎『日本統治下の朝鮮』岩波書店、1971年、215頁。
- 10) 西口克己『山宣』中央公論社、1959年、9～23頁参照。
- 11) 上掲、西口克己『山宣』、23～28頁参照。
- 12) 宇治山宣会公式サイトより。<http://ha2.seikyone.jp/home/yamashiro/yamasen/>
- 13) 佐佐木敏二『山本宣治』『日本近現代人名辞典』吉川弘文館、2004年、1116頁参照。
- 14) 前掲、西口克己『山宣』、47頁。
- 15) http://www.kyoto-minpo.net/yamasen/archives/2008/10/post_59.php
- 16) 前掲、宇治山宣会公式サイト参考。宇治山宣会編『民衆とともに歩んだ山本宣治』かもがわ出版、2010年、18～21頁参照。なお、本書を提供して下さった山宣会の藪田秀雄氏に謝意を述べておく。
- 17) 当時、古都京都を訪ねる内外の著名人は都ホテルで宿泊するが多かった。特に総合雑誌の改造社主催の行事で招かれた人は都ホテルが宿泊先になる事が多かった。1921年に日本を訪れたバートランド・ラッセル夫妻も都ホテルで宿泊しながら、京大や周辺大学から27人の学者らと会談している。日高一輝『人間バートランド・ラッセル』講談社、1971年、110～111頁参照。ラッセルはアインシュタインとともに反戦知識人運動クルルテで活動し、1955年のラッセル・アインシュタイン宣言を行った平和学者でもあった。ちなみに、1921年9月号の『改造』には西田幾多郎、土田杏村、大杉栄らのラッセル印象記が掲載されている。『改造』1921年9月増大号、81～108頁参照。なお、同誌にはラッセルが「文明の再建」というタイトルの論文を寄せている。
- 18) 前掲、西口克己『山宣』、104～107頁参照。
- 19) 宣治は「……妻を機械から昇格させて奴隷だとすれば、結婚生活は、夫と称する主人が、妻と称する奴隷を飼い、この奴隷をして昼は家事を処理せしめ、夜は寝室の世話をさせることであり、疑うべくもない一の奴隷制である。」と、当時の結婚形態を批判している。前掲、西口克己『山宣』、140頁。
- 20) 本籍は蔚山郡下廂面東里613番地で、朝鮮語学会事件の際、名字は「月城」として通していた。「朝鮮語学会事件予審終結決定文」より。紺谷延子編『セツピョル第2集』詩人尹東柱を偲ぶ京都の会、2005年、写本再引用、非売品。なお、蔚山市中区では2010年3月23日に韓国初のハングル記念館である崔鉉培記念館を開館している。
- 21) 宋友恵『空と風と星の詩人尹東柱評伝』愛沢革訳、藤原書店、2009年、241頁参照。
- 22) 前掲、宋友恵『空と風と星の詩人尹東柱評

- 伝], 264頁参照。
- 23) 新人会の当時の活動や動向については拙稿の「金斗鎔の思想形成と反帝国主義社会運動」『日本語文学』第38輯, 韓国日本語学会, 2007, 360~380頁 (韓国学術振興財団研究助成課題論文) で詳細に追究している。
- 24) 李修京『帝国の狭間に生きた日韓文学者』緑蔭書房, 2005年, 13頁参照。なお, クラルテ運動に関しては上掲書の他, 拙著の『韓国の近代知識人と国際平和運動』(明石書店, 2003, 日本学術振興財団出版助成), 『「種蒔く人」の精神』(共著, DTP 出版, 2005), 「戦争と文学—クラルテの思想と知識人の役割—」『季論』創刊号 (本の泉社, 2008) などを参考されたい。
- 25) 前掲, 李修京『帝国の狭間に生きた日韓文学者』, 12~13頁参照。
- 26) 前掲, 西口克己『山宣』, 146頁参照。
- 27) 関東大震災については李修京・山田昭次らの『世界史の中の関東大震災』(日本経済評論社, 2004) を参考にさせていただきたい。
- 28) 前掲, 西口克己『山宣』, 146頁参照。
- 29) 塩田庄兵衛・橋本進編『反戦平和に生きた人びと』草の根出版会, 1999年, 55~56頁。
- 30) 前掲, 西口克己『山宣』, 201頁。
- 31) 中心人物は外務政務次官で三井財閥をバックとしていた森恪, 補佐役は内閣書記官長鳩山一郎, 奉天 (現在の瀋陽) 総領事吉田茂であった。前掲, 西口克己『山宣』, 201頁参照。
- 32) 現在の神田税務署で行っている。なお, この事は筆者が現地調査で初めて確認し, 次の論文で明かにした。李修京「韓国の近代文学者と日本」『文学と意識』2008年秋号, 271~286参照。
- 33) 李修京『近代韓国の知識人と国際平和運動』明石書店, 2003年, 46~55頁参照。
- 34) 上掲, 李修京『近代韓国の知識人と国際平和運動』, 61頁参照。
- 35) 1925年8月17日の中西歓迎懇親会の写真は次の論文で公開されている。権寧珉「中西伊之助と一九二〇年代の韓国文壇」『社会文学』第7号, 1993, 128頁。
- 36) 鄭映恵「ポストコロニアル・フェミニズムは近代国家を揺るがすか」花田達朗・吉見俊哉・

- コリン・スパークス編『カルチュラル・スタディーズとの対話』新曜社, 1999年, 106頁。
- 37) 洪盛原『されど』安宇植訳, 本の泉社, 2010年, iv。
- 38) 西川長夫「文学のひろば」『文学』1995年春号, 93頁。
- 39) 西川長夫「文学のひろば」『文学』1995年春号, 93~94頁。
- 40) 最近, 朝鮮学校に配達されたカッターナイフと脅迫文による在日韓国朝鮮人排斥の動きからも深刻な状況が伺える。李修京「朝鮮学校に配達されたカッターナイフと卑劣」『Seoul Culture Today』2010年3月10日インターネット版記事。http://www.sctoday.co.kr/news/articleView.html?idxno=4732

参考文献・資料・ウェブサイト

- 『文芸戦線』創刊号~第1巻第5号, 第2巻第1号~3号, 第5~6号, 第8号, 第3巻第7~10号。
- 『改造』1921年9月増大号。
- 李修京・山田昭次ほか『世界史の中の関東大震災』日本経済評論社, 2004年。
- 李修京『韓国の近代知識人と国際平和運動』明石書店, 2003年 (科学研究費出版助成)。
- 李修京『帝国の狭間に生きた日韓文学者』緑蔭書房, 2005年 (第9回日本女性文化賞)。
- 李修京ほか『「種蒔く人」の精神』DTP 出版, 2005年。
- 李修京「金斗鎔の思想形成と反帝国主義社会運動」『日本語文学』第38輯, 韓国日本語学会, 2007年 (韓国学術振興財団研究助成課題論文)。
- 李修京「戦争と文学—クラルテの思想と知識人の役割」『季論』創刊号, 本の泉社, 2008年。
- 李修京「韓国の近代文学者と日本」『文学と意識』2008年秋号。
- 李修京「軍国主義の武力行為に抵抗した文学青年考察」『亜細亜文化研究』第17号, 韓国 Kyongwon 大学, 2009年。
- 李修京「平和を希求し, 武力に抵抗した文学青年考察」『東京学芸大学人文社会科学系 I』第61集, 2010年。

任キュチャン編『일본프로문학과 한국문학』ソウル, 연구사, 1987年。

大和田茂「中西伊之助序論」『社会文学・1920年前後』不二出版, 1992年。

權寧珉「中西伊之助と一九二〇年代の韓国階級文壇」呉皇禪訳『社会文学』第7号, 1993年。

コリン・スパークス編『カルチュラル・スタディーズとの対話』新曜社, 1999年。

洪盛原『されど』安宇植訳, 本の泉社, 2010年。

紺谷延子編『セッピョル第2集』詩人尹東柱を偲ぶ京都の会, 2005年, 非売品。

佐佐木敏二「山本宣治」白井勝美ほか共編『日本近現代人名辞典』吉川弘文館, 2004年。

塩田庄兵衛・橋本進編『反戦平和に生きた人びと』草の根出版会, 1999年。

宋友恵『空と風と星の詩人尹東柱評伝』愛沢革訳, 藤原書店, 2009年。

高柳俊男「中西伊之助と朝鮮」『三千里』第29号春号, 1982年2月。

高柳俊男「朝鮮文学に就て」「中西伊之助と朝鮮をめぐる文献」季刊『文学的立場』第3次第5号, 日本近代文学研究所。

館野哲編『韓国・朝鮮と向き合った36人の日本人』明石書店, 2002年。

西川長夫「文学のひろば」『文学』1995年春号。

西口克己『山宣』中央公論社, 1959年。

花田達朗・吉見俊哉・コリン・スパークス編『カルチュラル・スタディーズとの対話』新曜社, 1999年。

朴明用『韓国프로레타리아文学研究』ソウル, 글벗사, 1992年。

日高一輝『人間パートランド・ラッセル』講談社, 1971年。

宇治山宣会編『民衆とともに歩んだ山本宣治』かも

がわ出版, 2010年。

山辺健太郎『日本統治下の朝鮮』岩波書店, 1971年。

李修京「朝鮮学校に配達されたカッターナイフと卑劣」『Seoul Culture Today』2010年3月10日インターネット版記事。http://www.sctoday.co.kr/news/articleView.html?idxno=4732

宇治山宣会公式サイトより。http://ha2.seikyone.jp/home/yamashiro/yamasen/

中西伊之助研究会ホームページ http://ameblo.jp/nakanishi-inosuke

【附記】

筆者が立命館のキャンパスで修学し、大学教壇に立って早10年になるが、教育者の役割が如何に重要かを最近、改めて感じている。心のない人は簡単に人を陥れる悪意を行うが、反対に苦しむ人に教育の手を差し伸べ、立ち直らせ、社会で生きる術を教えることも人がする。そこに教育者の偉大な力があると思う。そういった側面から中川勝雄先生は教育を実践的に行って来られた良心的人格者として、筆者は尊敬の意を忘れた事がない。個人的に、筆者が最も苦痛に試され、学問を放棄しようと思った院生時代、中川先生流の実に適切な激励と応援を頂いている。おそらくその時の先生の暖かい言葉に遇わずにいたら、今の私はいなかったかも知れない。先生から頂いたその時の教育的励ましに触発され、その意を受け継ぎ、筆者は現在の職場でキャンパスライフ委員長を経ながら多くの人々の人生に携わって来た。そして、今や学部と院を合わせて40人ほどのゼミ生を受け持ち、必修科目の国際人権教育をも担っている。そこには中川先生から頂いた教育的方法も多分に活用されている。この紙面を借りて、恩師・中川勝雄先生には心底から深く感謝の辞を申し上げておきたい。

Senji Yamamoto and Inosuke Nakanishi –two pacifists who were brought up in Uji: Memory of the peace that Yoon Dongjoo left

YI Sookyung *

Abstract: This article is intended justify the people (including colonized people) who suffered in wartime history and to consider Yamamoto Senji and Nakanishi Inosuke, who had appealed more than any others, in the struggle to gain some hope concerning the humanitarian solidarity of citizens regardless of boundaries. In addition, this article is intended to study, how those two were related to Korea and what their activities suggest to this era. Especially, they have similarity of being raised in Uji. I am interested in the activities of a committee for the erection of a monument inscribed with a poem, which was established for the purpose of “memory and reconciliation” in Uji, a city that has declared itself to be “a City of human rights and peace”, since the final photo taken at Uji by Yoon Dongjoo became a topic. Yoon Dongjoo, who was highly evaluated as “resistant poet of peace” took a photo at the Amagase-Tsuri Bridge of Uji river when he visited there with his schoolmate both of them were studying in Kyoto. Further, the writer focused on Nakanishi, who had made an accusation against the actual conditions of Power rule and wrote the first Japanese novel about the real and terrible circumstance of colonized Korea. Also focused on the point that Yamamoto, who was stabbed to death for opposing racism, violence, war and the maintenance of the Public Order Act, was raised in Uji. These interests lead to the writing of this article. Yoon Dongjoo was arrested on suspicion of violating the maintenance of the Public Order Act and died when he was 28 years old in the prison of a foreign country, also desired a peaceful society. This article considers mainly Yamamoto Senji, and Nakanishi Inosuke, who were dedicated to the concept of peace in Uji, the place that Yoon Dongjoo was honored and remembered, and refers to their activities and colleagues in the movement.

Keywords: Yoon Dongjoo, Uji, Yamamoto Senji, Nakanishi Inosuke

* Associate Professor, Tokyo-Gakugei University